

光明寺だより

第77号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030 西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る詩



豚と私 東京都 中條邦子 (42)

私はあなたを食べる
そしてあなたが食べた
穀物を食べる
野山で生きたかった
夢を食べる
子を取り上げられた
悲しみを食べる
そして私は生きている
だから私は
私だけのものではない
あなたの命が
私の中で生きている
だから私は命尽くして
生きなければならぬ

産経新聞「朝の詩」
平成23年度年間賞受賞作品

宗祖降誕会

5月25日(金)

★おつとめ 1時30分

★おはなし 2時

【講師】 兵庫教区・安養寺住職

足利孝之先生

*引き続き「総代会」を開催いたします

一口法話

一言の大切さ



年配の女性が、全く知らない東北の地にお嫁に来て、3人の子供を育てていた二十代の思い出を、ある新聞に投稿していた。

……買い物帰りの夕方、2人の幼子の手を引き、背中には乳飲み子。母親は土手をとぼとぼ歩いていった。

よほど疲れた顔をしていたのだろう。向こうから来た、作業服のおじさんがすれ違いに様に声を掛けた。

「母ちゃんえらいな。だけでもうちよつとの辛抱だよ。もうちよつとがんばれよ。もうすぐ楽になるからな」

そう言っておじさんは通り過ぎた。若い母親の目から涙が溢れて止まらなかつた。

知らない土地で、知らない人に掛けられたほんの一言に支えられてここまで生きてきた。

今の自分があるのはあの時のおじさんのあの言葉のおかげだ……

(『日本一心を揺るがす新聞の社説』より)

まことに心温まる感動的なお話です。

『雑宝蔵経』というお経の中でお釈迦さまは無財の七施という教えを説かれました。

これは、たといお金や品物がなくても、いつでもどこでも実践できる施しの道が七つあるという教えです。

その一つに「言辞施」というものがあります。

言辞施とは言葉の施しです。思いやりのある優しい言葉をかけてあげましょうということなんです。これならいつでもどこでも出来ます。

投稿記事に登場したおじさんの一言は、まさに、お釈迦さまの説かれた「言辞施」というものです。

施す心の底にあるものは、「ああ可哀想になあ。辛いだろうなあ。苦しいだろうなあ」という、「同悲同苦(共に苦しみ、共に悲しむ心)」の心です。

それは菩薩の心でもあります。あの時のあのおじさんは若いお母さんにとってまさしく菩薩さまだったのです。

ちなみに七つの施しには次のようなものがあります。

- 1・眼施・・暖かい和んだ目で接していきましよう

- 2・和顔悦色施・・いつもニコニコと接していきましよう

- 3・身施・・体を使って奉仕しましょう

- 4・心施・・思いやりの心を施しましょう

- 5・床座施・・座席を提供しましょう

- 6・房舎施・・安らぎの場所を提供しましょう

この「無財の七施」を要約しますと次のようになります。

いつも

優しさに満ちたまなざしと

明るい笑顔を忘れず

心温まる言葉を掛け合い

人のためには労苦を惜しまず

深い愛情と思いやりの心を持って

喜んで席を譲り合い

安らぎの場所を提供しましょう

どうでしょうか。一つでも二つでも実行できたらいいですね。



すでに用意された世界



大谷派の学僧清沢満之(1863~1903)師は自著『絶対他力の大道』の中で次のようなことを仰っています。

……請う勿れ、求むる勿れ。汝、何の不足あるか。若し不足ありと思わば、是れ汝の不信ならずや。如来は汝がために必要なものを、汝に賦与したるにあらざや……

意識すれば、「何をあなたは請求してるんですか。何の不足があるんですか。もし不足があると思うのならそれはあなたの不信ではないですか。如来はあなたに必要なものはすでに与えているはずですよ」ということです。

簡潔に言えば、「あなたに必要なものは全部与えられているじゃないですか。だから、それを喜んで頂いていけばいいんです」ということになりました。

まさにその通りだと思えます。私たちのこの世界では、私が生きるに必要なものはすべて与えられています。

空気にしろ水にしろ太陽にしろ、私にとって生きるに必要なものは、すでに用

意されています。しかもそれらは私を生かさうとする「ハタラク」を自然に備えています。

その「ハタラク」は、人間の力を超えたものです。ですからそれを仮に、「仏(法身仏)」と称しているのです。

つまり、私たちは、仏(法身仏)のちを生かす根源のハタラク)の世界の中で、生かされて生きているということになります。

これを昔の人は「仏のふところ住まい」と味わっておられたのです。

文字通り宇宙万有すべてのものが生きるに必要なものとして仏さまから与えられたものだと思っていかけたのです。

念仏者であり詩人でもあられた榎本栄一(1903~1998)さんは「生まれたら」と題した次のような詩を残されています。

「生まれたら」
いのちが 一つ生まれたら
そこには もう空気があって
日の光があって
水があって

『常照我』 樹心社

この詩は、清沢満之師の言葉を具体的に表現した詩だと思えます。まさに私たちは生きられるように用意された世界で生かされて生きているのです。この「すでに用意された世界」を「大悲の世界」と申すのです。



「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読み下さい

次回発行予定ー七月中旬

「県仏婦大会」松山で盛大に開催！

さる2月28日、県民文化会館（松山）において「愛媛県仏教婦人研修大会」が行われました。

松山組の僧侶と仏婦の皆さん方の音楽法要による開講式の後、鍋島直樹先生（龍谷大教授）の記念講演（『中村久子と歎異抄』）が行われました。

幼少の時、両手両足を切断され、過酷な人生を歩まれながら、ついにはお念仏のみ教えを支えに生きられた中村久子さんの生涯を、スライドを交え、お話しいただきました。

女史はお念仏に出遭えた慶びを多くの歌に残されていますが、その中に次のような歌があります。

一先の世に いかなる罪を 犯せしや 拝む手のなき
われは悲しき
一手はなくも 足はなくとも み仏の 慈悲に包まる
身は安きかな

彼女は自らの人生を振り返り、「良き師、良き友に導かれ、かけがえのない人生を送らせていただきました。今思えば、私にとって一番の良き師、良き友は、両手両足のないこの身体でした」と、語っています。



音楽法要の様子



会場前での記念写真

「東日本大震災追悼法要」厳かに修行



東日本大震災発生から1年を迎えた3月11日、光明寺本堂に於いて、西条仏教会所属寺院合同による「東日本大震災犠牲者追悼法要」を厳修いたしました。また、法要に先立って、地震発生時刻（2時46分）に合わせて、被災者追悼の鐘を僧侶全員で撞きました。今なお避難生活を送られている被災者のご苦勞を思い、一日も早い復興を心から願うばかりです。

「彼岸会法座」勤まる！



晴天に恵まれた3月24日(土)、小林顯英先生(大阪・法栄寺)をお迎えして「春の彼岸会法座」が開かれました。お話は、九州地方での葬儀でのお香典の習慣を通して、お念仏の教えを味わうというものでした。30名の参拝者がありました。

【講演主旨】

九州のある地方では、お通夜に「目覚^{めさめ}」と書いた香典袋を持参する習慣があります。

「目覚」には二つの意味が込められており、一つには亡くなった人に「もう一度、目を覚まして欲しい」ということ、今一つはこの私が「目覚める」ということです。

何に目覚めるのかというと、身近な人の死をご縁として、私の「いのち」の帰る先は「浄土」だということに目覚めるのです。

亡き人は「あなたも死んでいかなければならないんですよ。安心して死んでいけますか？」と問いかけています。

お念仏のみ教えは私たちに、この人生の旅が終われば阿弥陀さまのご本願のお力で直ちに浄土に帰らせていただくことを教えてください。

老少不定(誰が先に死ぬか順番は定まっていない)の人生にあって、「帰る処がある」ということほど深い安心感を与えてくれるものはありません。

帰る処を持つ・・・これがお念仏の教えです。

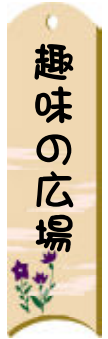
西山別院で「親鸞聖人750回大遠忌」厳修！

4月21日～22日、西山別院でご門主ご臨席のもと、親鸞聖人750回大遠忌が厳修されました。法要に先立ち稚児行列が行われ、京都にいる住職の孫(次女と三女)が参加しました。



親鸞聖人750回大遠忌記念 本願寺西山別院





俳句を楽しむ (五十六)

森本隆を

今年には桜の花が遅く四月中旬までお花見騒ぎが続き、高揚した気分は、ゴールデンウィークへそのまま引き継いでしまいました。いよいよ初夏、今年には五月五日「子供の日」に立夏が重なりました。今回は爽やかな風薫る五月ごろの句の中から、我々の色彩感覚に訴える季節を感じさせる佳句をいくつかご紹介して、俳句を楽しみたいと思います。

プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ

石田波郷

船よりも白き航跡夏はじまる

鷹羽狩行

江戸絵図の堀の藍色夏はじめ

木内彰志

みどり、白、藍という色を用いて初夏の爽やかさを詠んだ句です。特にはじめの二句は都会的な雰囲気を感じさせ、現代俳句の代表作の中にも数えられる句です。また、立夏と端午の節句という頃は、江戸時代から、^{あわせ}裕から単衣に着衣を替える風習があり、俳句の季語に「更衣(ころもがえ)」として今でもよく詠まれています。

うす青く街灯りけり夏衣

折橋綾子

日が長くなって日没後も明るさが残りなかなか暮れ切らない季節感を「夏衣」という季語だけでなく「うす青く」街が見える、という表現で効果的に詠んでいます。

五月には山野に若葉青葉の新緑が満ち溢れ、

このころに吹く少し強めの風を「青嵐」とい、また、青葉を吹き渡る風が緑の香を運ぶとみたことから「薫風」、「風薫る」などの季語があります。今回の「色を使った句」というテーマからみれば、

目の中に山がいつぱい青嵐

右城暮石

青嵐白衿きつくかき合はせ きくちつねこ別に風が青く見えるという訳ではありませんが、大きく広げた木々の葉の緑をわたる風の爽快感、新鮮な生命力あふれる季節感を表わす上で「青」という語のひびきが絶妙ですね。すぐ後に続く雨の降り止まぬ梅雨期、その長雨が止めば灼熱の酷暑と長い夏が待ち受けているのですが、せめては五月いつぱいは大自然の中にとけ込んで行楽の好季節を楽しみたいですね。さいわい私達の住む所はこれ以上ないくらい山、川、海といった自然に恵まれた場所ですから、大いに初夏の季節を満喫したいものです。初夏の山を詠んだ句、

たましひのまはりの山の蒼さかな

三橋敏雄

青嶺あり青嶺めざす道があり

大串 章

この二句も色彩を巧みに用いて五月の山の

姿やその遠山をめざす人間の意志、といった主題を大らかに詠んでいます。最後の話題として、初夏の風物、季節感を用いて効果的に詠んだ句で、しかも現代句を代表する女性俳人の代表句を三句、ご紹介します。

張りとはす女の意地や藍浴衣

杉田久女

生き堪へて身に沁むばかり藍浴衣

橋本多佳子

ひととせはかりそめならず藍浴衣

西村和子

三句とも「浴衣」の句でありその上に色も藍色という同じ色の浴衣の句です。その藍浴衣に女性特有の細やかな心情を託して詠んでおり、レベルの高い句です。近ごろは浴衣が余りかえりみられず残念な限りですが、日本の夏の夜に古来愛用された浴衣が少し見直される傾向にあります。ただ、デザインが洋風感覚で明るい色柄のものが流行しそつな点が、「何かチヨツと違っゾ」という感じがしないでもないのですが……。

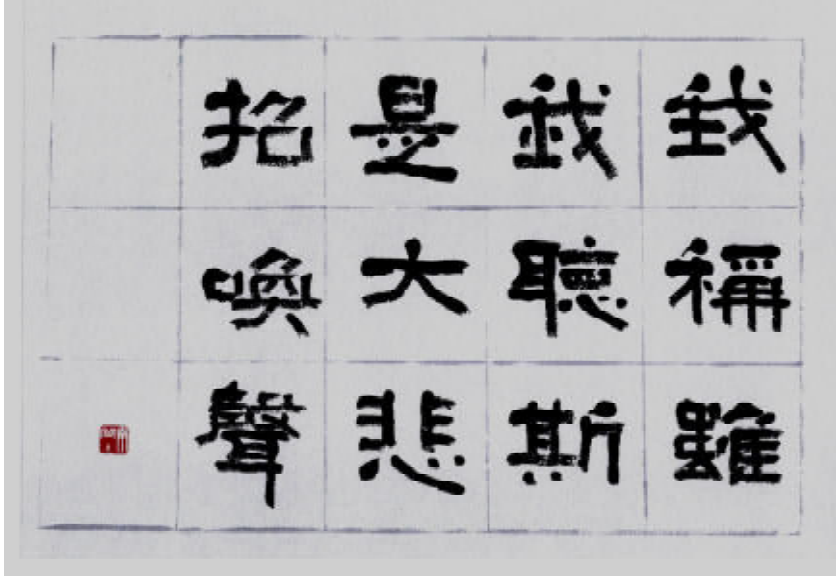


住職書作品



お念仏は私が称え私が聞くのですが、それはそのまま阿弥陀さまの「我にまかせよ必ず救う」という呼び声なのです。
みほとけの御名をと^{みな}なる我が声は我が声ながらとふとかりけり

甲斐和里子



(読み方) 我称え、我聴くといえども
これはこの大悲招喚の声なり

小林綾子 (NHKTV「おしん」の子役) 出演!

“くもの糸”の朗読とトーク

仏教定期講演会



★日 時 5月30日(水)

開場/18:00 開演/18:30

★会 場 西条市総合文化会館 大ホール

★入場料 500円

入場券無料で差し上げます。ご希望の方は光明寺まで。

平成24年度 総代会のご案内

日時 5月25日 (金)

★午後2時 降誕会

★午後3時半 総代会



言葉のプレゼント

失敗は
私の問題点を
知らせに来てくださる
大切なお使い

東井義雄



テレフォン法話

0897-53-4585



- ★2月28日(火) 愛媛県仏教婦人研修大会が県民文化会館で行われました。光明寺から17名の参加者がありました。 (*関連記事4ページ)
- ★3月11日(日) 西条仏教会所属寺院合同による東日本大震災追悼法要を光明寺本堂で厳修しました。
- ★3月15日(木) 涅槃会が行われました。終日参拝者で賑わいました。
- ★3月24日(土) 小林顯英先生をお招きして春の彼岸会法座が開かれました。 (*関連記事5ページ)
- ★5月30日(水) 西条仏教青年会主催の「くもの糸」講演会(小林綾子出演)が西条総合文化会館で行われます。入場券(五百円)を無料で差上げますので申し出下さい。 (*関連記事7ページ)

